

松蔭 校長室だより

—校長から保護者の皆さまへのメッセージです—

2020年 3月 19日 発行

松蔭中学校・高等学校
校長 浅井宣光

わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺(あざむ)くことはありません。(ローマの信徒への手紙 5:3~5)

感染リスクを最小限におさえながら学校運営の継続を

新型コロナウイルスの感染拡大に伴う臨時休校について、年度末の3月31日まで延長することになりました。春休みの補習やクラブ活動、海外派遣など学校活動の全てについて、感染予防の一環として中止しました。学校の記録を調べますと、2009年、新型インフルエンザが流行した際には、市内の高校で県内最初の感染者が出たため、その2日後、県内公立学校の一斉休校が指示されました。本校も、その時点ではまだ感染者はいませんでした。1週間余りの臨時休校の措置を実施しました。しばらくすると県内の罹患者数は減少傾向を見せ始めました。その後、夏休みを経て、秋頃から感染流行の第二波があったのですが、近隣地域で最初の感染者が確認された直後という段階での休校は、一定の効果があったように思われます。今回の臨時休校は、首相からの突然の要請と報道されています。法的な手続きや家庭のあり方への配慮不足など、様々な問題点が指摘されていますが、その後、公表される県内感染者数増加の状況をふまえると、タイミングとしては適切で、感染拡大抑制の第一段階としては、一定の役割を果たしたものと見ています。見通しを立てにくいところがありますが、今後も行政機関からの指導をふまえ、学校医とも協議しながら、生徒ならびに教職員の感染リスクを最小限におさえる措置を講じたいと考えています。保護者の皆様におかれましては、大変なご負担とご心配をおかけしておりますが、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

3月2日、高校卒業式を挙行了しました。聖歌隊もハンドベルによる祝福の演奏も、また、ご来賓の祝辞もなく、卒業生と保護者のみの式典とせざるを得ませんでした。また、本日19日には、中学卒業式を挙行し、これも時間短縮をはかり、簡略化して開催しました。卒業生や保護者の皆様、また、先輩を見送ることが叶わなかった在校生の皆さんに対しても、お詫びいたします。以下に、校長式辞(高等学校は全文、中学校は抜粋)を掲載しました。ご一読いただけますと幸いです。冒頭の聖書の箇所は、中高とも卒業式で読み上げられた言葉です。卒業生の皆さんには、希望をもって歩まれることを祈りたいと思います。

第72回松蔭高等学校卒業証書授与式 校長式辞(全文)

「卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。新型コロナウイルス感染症の影響で、皆さんの大切な卒業式を簡略化して行わざるをえなかったことについて、まずお詫びをいたします。申し訳ありませんでした。保護者の皆様におかれましては、ご息女の高等学校卒業という晴れ舞台をこのような形とせざるを得ませんでした。ご卒業をお祝いするとともに、お詫び申し上げたく存じます。また、これまで本校の教育活動に対し、ご協力を惜しみなく頂きましたことに、高い所からではございますが、厚く御礼申し上げます。有り難うございま

た。

卒業生の皆さん。皆様の松蔭生活も、残すところあと数時間となり、お祝いを申し上げる気持ちの一方で、別れの時が近づいていることに、名残惜しく、寂しい気持ちを感じています。ご入学以来、クリスチャンであるかどうかに関わらず、皆さんは聖公会キリスト教主義学校であるこの松蔭に、神様によって導かれたのだと、私たちは考えてきました。しかし、ただ今思いますことは、果たしてこの学校は、皆さんを十分に支援できたのだろうか。球根に秘められた花が咲き、さなぎの中の命が動き出すように、一人ひとりの内に秘められた力をこの卒業の日までに、最大限に伸ばすことができたのだろうか。もし、他の学校に入学して別の友と出会い、異なる環境の下で学校生活を送っていたとしたら、皆さんの人となりも能力も違う形で開花していたのではなかろうか。このようなことを思いつつ、一人ひとりのお顔を見ながら卒業証書をお渡ししました。間近に見る皆さんの表情は、卒業生としての誇りと自信にあふれ、実に素晴らしいものでした。今は少しばかり安心して、笑顔でお送りしたいと思っています。

卒業生の皆さんは、21世紀のスタートとともに誕生し、「新世紀ベビー」と呼ばれました。その年には、身近なところではユニバーサルスタジオジャパンがオープンしました。映画の世界を実際に体験するという、それまでにないコンセプトのテーマパークは、今なお私たちを惹きつける魅力があります。その年の9月、米国同時多発テロが発生し、ハイジャックされた旅客機が、乗員乗客を乗せたままニューヨーク中心街の貿易センタービルに次々と突っ込みました。ビルが一瞬にして倒壊する衝撃的な映像は、到底現実のものとは思えませんでした。米国は報復措置として、当時テロ支援国家と見なされていたアフガニスタンに侵攻しました。昨年末、日本人医師中村哲さんが、この国で反政府武装勢力に襲撃され命を落としましたが、彼は、戦争で破壊された農業基盤を立ち直らせるために力を尽くしていました。皆さんが生まれた「21世紀」という言葉の響きは、その時代に入るまでは、バラ色の平和な未来に一步近づく、というような印象があったものですが、現実はというと、それまでの時代と同様に、歴史のうねりはどこまでも繋がりを続けています。過去の出来事は、現在にも未来にも大きな影響を与え続けています。歴史に学ぶということも、大切なことだとあらためて考えています。

ご卒業にあたり、皆さんの母校となるこの学校の歴史に残る、一人の女性を紹介します。その女性の名は、レオノラ・エディス・リーです。中高のチャペルをレオノラチャペルと呼びますが、その由来となった、英国人女性です。松蔭は、ご存知のとおり英国聖公会が建てた学校で、明治時代半ばの建学以来、英国の教会組織から宣教師を兼ねた英語教員が派遣されていました。1929年、松蔭が現在の校地に移転した年に赴任したのがこのリー先生です。その方を知る人々は、敬愛の念をこめてミス・リーと呼び、後にミカエル国際学校の初代校長や松蔭の短大学長を務めました。ミカエル国際学校は、皆さんのなかにもスクールアシスタントのプログラムに参加した方もいて、あの学校のことだと思ひ浮かべると思います。

卒業生が語る彼女は、気高く、品位あふれる、まさにレディーであり、また、生徒たちにもレディーとして振る舞うよう教えました。学校へ向かうバスのなかで松蔭生を見かけると、エリザベス女王を彷彿とさせるクイーンズイングリッシュで、「Good morning. Can you speak English nicely?」と、気さくに話しかけたそうです。彼女の英語の授業は、実用的かつ的確であったと、記録にあります。生徒達に向かって“I am glad to see you.”と話しかけると、続いて“What did I say?”と尋ねました。生徒は、“You said, you were glad to see me.”と、時制を一致させ、主語と目的語を入れ替えて適切に文章化して答えなければならないので

(裏面に続く)

す。このような教授法は、現在でいうならば、スピーキングを柱とした4技能重視の英語教育と言えるでしょう。

さて、皆さんに紹介したいことは、英語教育論ではなく、彼女の「生き方」です。彼女は、聖公会宣教師の父のもと、カナダで生まれました。2歳の頃、父の布教活動に連れられて来日し、その後、英国で大学教育を受けた時期を除いて、75歳の生涯を終えるまで、60年もの長い年月を日本で暮らしました。

第2次世界大戦がヨーロッパで勃発した2年後の1941年の暮れ、日本は米国、英国に宣戦を布告しました。その頃の松蔭では、礼拝や聖書の授業はすでに行われていませんでした。そして英語の授業も、敵の言語であるとして禁じられたのです。リー先生をはじめ、英国籍の外国人教員たちは次々と松蔭を去り、週1時間のリー先生の授業も無くなり、期末テストは実施されることなく2学期が終わりました。新学期に入ると、いつの間にかリー先生の名前は、時間割表から消えていました。この頃の神戸の街の様子について、後にリー先生は次のように書き留めています。「町を歩くと、人々が私の顔を凝視したり、ひそひそと何かささやきあったりしている。街は戦争の始まりでピリピリとしていた。」西洋人の容貌の彼女が、当時の神戸の町で、行き交う人々から好奇の目で見られていたことは容易に想像できます。

翌年、戦争状態が続く中で、日本に住む英国人が本国に戻る、最後の日英交換船に乗るチャンスがやってきました。ところが、彼女は、カナダ生まれという理由でその船に乗ることが許可されませんでした。その翌年、米国への最後の日米交換船に乗るチャンスも、英国籍という理由で乗船を拒否されました。彼女には、日本国内に残るという選択肢しかありませんでした。英国人が日本に留まることは、敵国の人間として全ての日本人から憎しみをもって見られることであり、状況によっては、命が危険にさらされることも予測できました。その状況のもとで彼女は、日本に残ることが神様の導きである、と考え、苦難の中を生き抜く決意をしました。当時の日本には、様々な事情から彼女のように、母国に帰ることができない外国人がたくさんいました。警察によって毎日の行動が監視されるなかで彼女は、その外国人たちへの食糧支給などのヴォランティア活動を積極的に行いました。1945年6月、神戸は米軍の大空襲に見舞われ松蔭の校舎の多くが焼け落ちました。リー先生の住まいにも焼夷弾が落ち、彼女は戦火の中を命からがら逃げ延びたのです。

2か月後、日本の敗戦でようやく戦争が終わりを告げました。松蔭は、キリスト教主義教育を復活させて学校を再開することになりました。リー先生は松蔭に戻り、その後の学校の教育方針について、1つの提案をしました。それは、松蔭の教育の柱を「英語と芸術重点主義」にする、という内容でした。英語教育と芸術による情操教育を学校の柱にしようというのです。これは、現在の松蔭の教育のあり方に通じるものでした。彼女は、その生涯を通じて、一人ひとりが神に愛されたかけがえのない存在であることを、自らの生き方を通して伝え続けました。そして、戦後の日本人が、世界平和のために尽くすことができるよう祈りました。中高のチャペルは、リー先生が持つ精神的な気高さとおおらかさ、そして神様の導きに、自らを委ねた生き方に学ぶため、その名を取ってレオノラと名付けられたのです。このようにしてリー先生は、松蔭の歴史の中で、キリスト者、英語指導者として高く評価されてきました。異国の地で幾多の苦難を乗り越え、たくましく生き抜く勇気と知恵を兼ね備えた女性が、この松蔭のキャンパスに数十年もおられた、という事実にも、私自身も強く感動しています。そして、その姿勢を模範として、これからの時代を生きていかねばならない、と思っています。

21世紀最初の世代である皆さんが生きる10年後、20年後のグローバル社会の有り様を想像する時、しばしば言われるように、その実際を容易に見通すことはできないでしょう。人類は、これまで歴史が経験したことがない状況に直面することは間違いありません。新型コロナウイルス感染症が、歴史上かつてない速さで

全世界に拡大していることは、グローバル社会の負の側面にほかならないように思います。リー先生が、第2次大戦前、そして、戦中、戦後の日本で、未来を予測できない中、直面する苦難を乗り越えようとした姿、勇気を自らの内に奮い起こし、知恵をもって賢明に生き抜こうとした姿は、グローバル社会を生きる将来の皆さんにも、求められているように思います。リー先生の場合には、その強い精神力の源がキリスト教の信仰であったことは当然のことです。皆さんの将来においては、自分なりに人生を生き抜く力の源を見つけるもよし、もしリー先生のように、松蔭で出会った聖公会キリスト教のなかに、その力の源を見出すことがあるとしたら、学校にとってこれほど喜ばしいことはありません。

皆さんが過ごした松蔭生活は、青春時代の数年間に過ぎませんが、一人ひとりの18年の人生は、130年におよぶ松蔭の歴史が築いてきた全てのものによって、ふんわりと包み込まれているように思います。誇りを持ち、どのような時にもくじけることなく、ご自分の足で歩みを進められるよう、心から願います。

最後になりますが、皆さんの松蔭生活は、実に多くの方々に見守られてきたものだ、とあらためて振り返っています。中学からの入学生の皆さんにとっては、学年主任を2年間務められ、一昨年、天に召されました国語科の高田実千代先生が、神様とともに皆さんを静かに見守っておられたようにも思います。私も、一人ひとりの幸せを祈りつつ、式辞を結びます。ありがとうございました。2020年3月2日、学校長 浅井宣光。」

第73回中学校卒業式 校長式辞(抜粋)

「本日の卒業式は、聖歌隊や在校生も出席しませんし、簡略化して実施していますが、そのような形であっても卒業式を行う意味があると、私は考えています。それは、中学卒業が皆さんの人生において、とても大きな節目の瞬間であるからです。具体的には、小学校以来9年間の義務教育期間を終えることになるからです、義務教育の義務とは、皆さんが教育を受ける義務があると理解しているかも知れませんが、皆さんの義務ではありません。保護者の方にとって、子供を学校に通わせ、教育を受けさせる義務がある、ということです。では、皆さんはどのような立場かと言うと、教育を受ける権利、学習する権利があるということになります。本日、中学校卒業を迎え、そのような義務教育制度の中の最後の日を迎え、来月には高等学校に進学します。

皆さんは、何のために高校に通学するのでしょうか？ みんなが行くから一緒に行く、当たり前のことだから何となく進学する、などと感じているならば、それは少し幼稚な考え方だと思います。義務教育を終えて、高校に進学することは、保護者の方が、皆さんに立派な大人に成長して欲しい、そのために高校教育を受けさせたいと考えるからです。だから学業だけでなく、行事やいろいろなプログラム、部活動や個人の活動など、自分の活動範囲を中学校よりも大きく広げていただきたいと思います。その一方で、子どもの成長を願う親の思いも受け止めて、感謝の気持ちを持つ義務のようなものもあると思います。このことを自覚して、4月の高校進学の日を迎えてください。(中略) 本日は、皆さんの中学校卒業という晴れ舞台ですが、卒業生の皆さんの中には、この後、松蔭を離れて別の道を歩むことを選択した方もおられます。松蔭高校に進学する方、一方で新たな場所でのチャレンジに踏み出そうとしている方、そして、本日この場に集うことが叶わなかった方。今日の晴れ舞台は、そのような松蔭につながる全ての中学3年生のために、祈る時間でもあると、私は思っています。皆さんの未来への希望と、心の平安が絶えることなくあり続けることをお祈りいたします。今後、現在の感染症流行の状況が今後どうなっていくのか予測ができませんが、この困難を乗り越えて、次のステップへと進む強い気持ちを持つ、くじけずに前に進もう、と共に誓いたいと思います。」